

# 記者の目

長野 宏美  
外信部



日本の刑務所は社会的弱者の終着点になっている。万引きや無銭飲食など、軽微な罪を重ねる累犯者の取材を通して感じたことだ。経済的困窮や社会的孤立の結果、「回転ドア」のように刑務所に戻ってくる人の中には知的障害者や高齢者が少なくない。私は市民が量刑を判断する裁判員制度をきっかけに刑罰のあり方に関心を持ち、取材を続けてきた。2月には、人権について学ぶ米國務省主催の研修に参加し、米国の裁判所や刑務所を訪れた。日本と異なる実情を垣間見て、再犯を防ぐには刑務所のあり方を見直す必要があると感じている。

## 仕事や親子関係 役立つ講座多彩

米カリフォルニア州サンフランシスコから東に約400キロ。アラメダ郡のサンタリタ刑務所は約4000人の男女を収

## 「米国で考えた日本の刑務所政策」

容する。短期刑の受刑者と裁判中の未決勾留者の他、1晩で保釈される人もいる。日本では刑務所と拘留所と警察の留置場が一緒になったような施設だ。

就寝時間も決まっていない。「彼らは自立した大人だ」と副保安官。ここでは日本の懲役のような強制労働はなく、希望者が無給で洗濯などの作業をするという。

では、何をしているのか。パソコンや調理、怒りの処理法、読み書きなどを学ぶプログラムがあり、600人以上が参加している。目を引いたのが「母親講座」。アルコールや薬物依存から子供を虐待する親も多いため、中毒から回復する方法も教える。刑務所から社会にうまく移行できるように、住まいや仕事探し、親子関係の再構築なども手助けする。別の講座では女性収容者がパンの焼き方を学んでいた。ほほ

昨年犯罪白書によると、再犯率は45.3%で16年連続の上昇。また、この1年間に入所した65歳以上の高齢受刑者は20年前の5.6倍に激増し、再入者の割合が高い。国内外の刑務所を視察している加毛修弁護士(第一東京弁護士会)は、規則づくめで主体性が抑えつけられる収容生活では社会に適応できない。刑務所に長くいるほど仕事や住まいもなくなる。社会復帰に向けて必要な訓練をする方向に転換すべきだ」と指摘する。

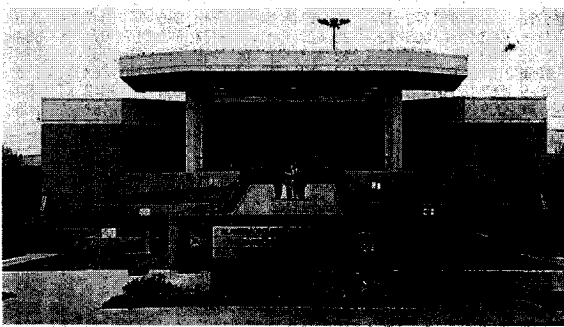
まず感じたのは施設内に流れる空気の違いだ。再犯者が多く入る、ある日本の刑務所では隊列を組んで移動し、私語は厳禁で何もかもが張り詰めていた。一方、サンタリタ刑務所は悪く言えば緩い、良く言えばおおらかな雰囲気だった。「外観は学校みたいでしょう」と案内役の副保安官は説明する。共有スペースでは収容者がおしゃべりしながらテレビを見ていた。起床や

を学んでいた。ほほ笑みかけてくる人もいて、囚人服を着ていなければ刑務所にいることを忘れそうだった。副保安官は「累犯の悪循環を断つには教育や支援が重要で、多様な選択肢の提供を目指している」と強調した。受刑者は自由の制限という罰を既に受けており、罪への応報だ

けでなく更生の視点を大切にしていた。ジョージア州アトランタのフルトン郡少年裁判所では、犯罪につながる問題の早期発見について考えさせられた。黒人少年(16)が車の窓ガラスを割った事件。少年は学習障害の疑いがあり、裁判官が本人の意向も丁寧に聞いたうえで、弁償金ではなく社会奉仕活動を命じた。ブラッドリー・ポイド首席裁判官は「障害を見落とし、適切な対応を受けない。問題に気付くことが重要だ」と指摘した。近く、障害者を調べてカウンセリングなど必要な支援をする専門家を裁判所に配置予定という。

新受刑者の5人に1人は知的障害が疑われているうえ、人口動態を超える速さで受刑者は高齢化している。罪の背後にある問題に目を向け、刑務所が社会的弱者の最後の行き場にならないよう教育や支援にもっと力を注ぐべきだ。裁判員制度導入から5月で5年。政府は12年に「再犯防止に向けた総合対策」を策定したが、刑罰のあり方もともに考える時がきている。

# 社会復帰重視に転換を



米カリフォルニア州のサンタリタ刑務所の入り口は「刑務所というより学校」のようにも見える—2014年2月14日、長野宏美撮影

規則づくめより 「弱者」支援厚く

前述の刑務所でも、知的障害やホームレス出身の受刑者が多いと聞いた。どこかでセーフティネットに引っかかれば、刑務所が居場所にならずに済むのは日本と同じだと感じた。米国の刑務所は州や種類によっても異なり、全体的に見れば日本以上に問題を抱えていると思う。だが、私

2014.4.24